

藤田浩子の 少し昔のこと 〈76〉

夏休みの宿題

私が子どものころ、家庭科は女の子だけの科目でした。そして夏休みには必ずなにか作品をひとつ提出することになっていました。雑巾に始まって、エプロン、浴衣、スカート、簡単なワンピース、ミシンのない時代でしたから、みんな母に縫ってもらってごまかしました。なるべくヘタに縫ってくれと頼むのですが、母には母のプライドがあったらしく、縫いあがった作品はみな立派なものでした。多分先生も、これは運針のへたな私の作品ではないということに気づいていらしたのでしょうけれど、何も言われませんでした。



中学3年のとき、夏休みの宿題に縫物を提出する代わりに、私なりの「論文」を書いて提出しました。何を書いたか細かいところは忘れてしまいましたが、家庭というのは男と女が協力して築いていくものだ、なんで女ばかりが家庭科をしなければいけないのだというようなことを、生意気な口調で書いたのです。担任は女性の先生でしたけれど、いい先生でしたね。私の言いたいことをきちんと受け止めてくださいました。今思えば、もしかしたら、ご自分もそのことで悩んでいらしたのかも知れません「男が料理をしたり縫い物をしたりするようになるまで、まだまだ時間がかかるでしょう、だれかがしなければならぬものなら、上手にできたほうが気持ちがいいでしょ、その練習だと思ってやったら？」とってくださいました。

毎年、夏休みの宿題をまあまあこなしてきましたが、私としては、あのときの「論文」こそ一番力が入っていたように思います。何をえらそうに、わかったような気になって書いたのでしょうかねえ。いま読んでみたいと思いますが、たびたびの引越してどこかにいってしまいました。

リレー連載 <209>

わたしの大好きな絵本

かずみん（藤心小おはなし会きらきら）

がまくんとかえるくんシリーズが好きです。季節に合わせたお話が収録されたこの「ふたりはいつも」を、読み聞かせて読む頻度が高いです。ふたりの優しさにいつも癒されます。

特に「おちば」が好きです。相手の喜ぶことをして、幸せな気持ちになるお話。結果はどうあれ、人のことを考えて、その人のために行動することは、素敵だな、と思わせてくれるお話です。

作者本人が朗読しているCDもあり、英語版もお勧めです。

『ふたりはいつも』

作・絵：アーノルド・ローベル

訳：三木卓

文化出版局

